MARUBI
富士吉田市歴史民俗博物館だより
31
2008.11.30
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS

■大事に扱われるホウコウ

富士吉田あれこれ

願いのカタチ

古来より人々は、さまざまな願いをカタチに表して信心してきました。なかでも人形は、その願いを具象化した最たるもので、代表的なものでは、女子の健やかな成長を願う雛人形などがあげられます。市域にもこのような「人形」を用いる行事が残されており、大晦日の大祓、小正月の道祖神祭、雛祭りなど、冬から春にかけての行事に多くみられます。これらの行事ひとつひとつを取り上げてみると、神社や地区、また各家庭で行われるものとその内容や形態はさまざまです。こうした行事が行われる背景には「人形」を通して「健やかでありたい」という人々の祈りや願いが込められているように思われます。それは「人形」というものが、単に愛玩や観賞のためのものではなく、信仰や呪いの対象として生まれ発達してきたことに由来するからかもしれません。

市域においては、正月13日から17日の小正月の期間にかけて道祖神祭（塞ノ神祭）がおこなわれています。かつては、各地区にお神木が建てられ、それぞれ祭りをおこなっていましたが、現在ではお神木を建てて祭りをおこなうところは、明見地区の小明見・向原、上宿、新屋地区の新屋・責草と少なくなっています。

この小正月の祭り行事において建てられるお神木にはさまざまな飾り物が括りつけられ、ヒイチと呼ばれる三角形の袋やホウコウ（這子）という人形が特徴的に飾られている様子をみることができます。ホウコウは、長方形の赤い布に綿などを詰めて、布の角と角を縫い合わせて手足を作り胴体とし、あとに適当な大きさの白い布を袋状に縫い縮めて頭となる部分を作り胴体に縫い付けます。顔は描かないことが多いですが、頭髪や頭巾を被せることもあります。ホウコウやヒイチは、厄除けの祈願が込められており、厄年の人が奉納することが多いものです。ホウコウには、厄除けの願いの他に子宝や子育て祈願として奉納されます。祭りの後で希望者に分け与えられますが、需要が多いと抽選や競りで貰い受けるところもありました。小明見地区丸組の例では、子宝祈願でホウコウを譲り受ける際に、前年から予約をします。小正月を迎え、祭りが終わると、お神木に奉納されたホウコウが取り外され、祭事長のところにホウコウを貰い受けにいきます。祭事長からホウコウの取扱いを聞き、伝えられたとおり「自分の子」として大事に扱います。食事の時には席と箸、茶碗も用意したり、外出する際も車に乗せたりするそうです。大事にされ、ご利益を授かったホウコウは、糸をほどいて枕などに縫い直すか、小正月におこなわれるドンドン焼きでお焚上げされます。子どもが授かった場合は、「お礼」として、新しくホウコウを作ってお神木に奉納します。現在では、奉納され、譲り受け、また新しく奉納されるという循環がシステム化されていますが、昔から子宝、子育て祈願という子どもに対する「願い」が受け継がれています。

さて、近年伝統的な行事を観光や町おこしに取り入れてイベントを行うところが多くあります。全国的にも観光資源等の一つとして商品化されることによって、本来の行事や受け継がれてきた精神が、形骸化あるいは異なる認識のものとして一人歩きしてしまう事例もみられます。紹介したホウコウもその一つで、現在では、さまざまな大きさや色使いのカラフルなものがマスコット的に出回り始めています。

今の世の中、昔から地域に受け継がれてきた伝統的な祭りや民俗が、現代感覚との整合性という秤に掛けられることによって、その伝承が打ち消されてしまうことがあります。時代とともに変化していくことは必然ともいえますが、できることならば歴史認識やそこに内在する人々の願いを大切にし、伝統文化に新たな価値を賦課（ふか）しながら、将来に伝えていけるようにしたいものです。

（布施光敏）

参考文献
●『子授けを願う人形 - 小明見丸組のホウコウ』
雪解流第30号 2008 富士吉田市文化協会

博物館Report

富士に祀られた神仏 企画展『富士の神仏』補足資料の紹介

富士に祀られた神仏 企画展『富士の神仏』補足資料の紹介

はじめに

当館では、今夏『富士の神仏』と題し、富士山中や富士信仰関連寺社に奉納された仏像および神像を一堂に集める試みの企画展を行いました。富士山では現在も山小屋に神仏が祀られていますが、明治初年の神仏分離令、昭和の富士山自動車道路の設営による山小屋の閉鎖等で、富士山から降ろされ、各地に散らばってしまいました。企画展では、その中で調査・把握されている彫像を、関連寺社を含めて20体余り「里帰り」展示しました。

今回は、展示や図録では詳細を紹介できなかった仏像や、新しく寄せられた情報によって富士山の仏像と判明した作例をご紹介します。

毘沙門天立像　富士山頂　薬師ヶ嶽

■銅造　台座高14.3cm　像高31.7cm（剣を含まない）
富士河口湖町　個人蔵　江戸時代　文化9年（1812）

銘文

（台座前面）
奉安置
富士山上
頂師
薬蔵
武国
足嶽
与町
願主
野郡
立
蔵
井原平八芳章
（英）
同
行

（台座背面）
文化九壬申年
六月吉日
鋳工
粉川市正作

富士山頂薬師ヶ嶽に奉納された毘沙門天立像。台座の銘文により、鋳物師の粉川市正（こがわいちまさ）が制作し、文化9年（1812）に、武蔵国足立郡與野町（埼玉県さいたま市）の丸英講の井原平八と芳章が願主となって奉納したことがわかります。粉川市正は江戸神田鍋町を中心に、代々「粉川市正」を襲名して鋳物師を営み、梵鐘などを多く手がける職人の一族でした（※1）。本像の製作者は、製作年代からすると粉川市正藤原国信の作と推定されます。

本像は銅造で、光背・体・岩・台座を別鋳し、接合しています。各所に鍍金が残り、銅の鋳上がりが良く、動きのある造形ながら、全体のバランスがよい秀作です。富士山の八合目以上は富士山本宮浅間大社（富士宮市）の境内地とされますが、薬師ヶ嶽は吉田口登山道の頂上であり、そこに吉田口が積極的に登山者を受け入れた関東圏の人物が奉納していることなど、吉田口に縁の深い像です。

本像は近代に入って、道者が富士山から降ろし、縁のあった家に預けた物と伝わっています。当家では、粗末にしたり動かしたりすると良くないことが起きるとのことで門外不出にされています。

毘沙門天は仏教を護法する武人、四天王の1人で、多聞天とも称されます。本像もその一般的服制に倣って甲冑をつけて左手に宝塔を持ち、右手に剣を持ち邪鬼を踏んで立っています。

富士山と毘沙門天像とのつながりは明確ではありません。本像の奉納された薬師ヶ嶽は、薬師如来を祀る薬師堂の所在したところです。薬師が脇侍に毘沙門天を従えることはありませんが、毘沙門天は近世には七福神の1人に数えられるため、福徳神として祀られたことも考えられます。

〈註〉
※1　内野勇樹「鋳物師「粉河市正」について」（『多知波奈の考古学』―上野恵司先生追悼論集―橘考古学会　2008年）

大日如来坐像　富士山頂　大日嶽～剣ヶ峰付近

かつて、富士山頂の大日堂から剣ヶ峰に向う道沿いに置かれていた銅造の大日如来の像です。嘉永元年（1848）に描かれた紀行書『富士山真景之図』（※2）によると、剣ヶ峰の手前に、「天文十二年」（1543）と記された大日如来の坐像が描かれています。本像も腕に「天文十二年」と刻まれ、大日如来であることから、この絵の大日如来像に相当すると考えられます。本像の銘文は両腕と脚部に刻まれ、年紀の他、「濃州可児（かに）郡下荏戸之郷金屋村」（岐阜県可児市今渡地区）の「九郎二郎」という奉納者の名前も記されています。仏像の腕や脚部に直接銘文を彫り刻む例は珍しい例です。金屋村は鋳物師の職人集団が住んでいた村で、天文12年の頃は、特に製作活動が盛んな時期でした。仏像も同地で製作された可能性が高いものと考えられます。

現在、可児市の郷土歴史館に置かれる本像は、富士山頂から掘り出されたと伝えられ、静岡県御殿場市の東岳院に保管されていました。近年、製作地である可児市へ寄贈され、市の指定文化財になっっています。像は現在頭部を欠損していますが、明治の廃仏毀釈による破壊のためとも想像されます。智拳印を結ぶ胎蔵界の大日如来です。構造は、型を使って胴部、脚部、両腕、頭部（欠失）に分けて鋳造され、接合されています。接合部はやや仕上げが荒く、脚部前面や腕などの各所にバリも残っています。

富士信仰というと富士講があげられ、江戸で盛んだったという印象がありますが、東海・近畿でも、古くから富士の信仰が盛んでした。関西方面から富士山へ登拝する者は、大宮口（富士宮市）を代表とする静岡側から登っており、そのためか富士山本宮浅間大社（富士宮市）の社地である富士山頂には、岐阜県や愛知県など、東海・近畿方面での製作奉納物が多く見受けられます。特に、大日如来は富士山の本地仏であり、山内や関連寺社に最も多く作例が残されています。

〈註〉
※2　嘉永元年（1848）、江戸築地鉄砲洲の富士講先達長島庄次郎が記した挿絵付きの紀行文。『富士山真景図』（名著出版1985年）に復刻される。また、富士吉田市史史料編第5巻近世」（富士吉田市史編さん委員会　1997年）に所収される。

■銅造　坐高24cm（頭部欠失）　可児市指定文化財　可児郷土歴史館保管
室町時代　天文12年（1543）

■腕に刻まれた銘文

銘文

天文十二白癸卯
五月十六日
濃州
可児郡下荏戸之郷
金屋村　願人九良二良
同　石　州

富士に祀られた神仏 企画展『富士の神仏』補足資料の紹介

大日如来坐像　千手院（大明見浅間神社）

市内大明見の浅間神社境内地にあった寺院、千手院の本尊（※3）と伝えられる大日如来坐像です。

本像は法界定印を結ぶ胎蔵界の大日如来で、構造は複数の木材で作る寄木造、目には水晶をいれる「玉眼（ぎょくがん）」で、銅製の宝冠をかぶっています。体の厚みがなく、丸みを帯びた顔の輪郭、造作が細やかな点などから、江戸時代の製作と推定されます。かつてはこの仏像を厨子に背負った僧が、布教活動に廻ったと伝えられています。その為か、蓮華座と像と光背は、しっかりと糊付けされそれぞれがバラバラにならないよう固定されています。

明治の神仏分離令まで、日本各地の神社には別当寺という役職の寺がよりついていました。別当寺とは、特定の神社を支配し、社内の仏教行事を取り仕切る寺のことで、神と仏が同一視されていた江戸時代末まで各地の神社に設けられていました。千手院も「別当寺」という役職名こそありませんが、状況からすると、神社内の仏教儀礼の執行などを行っていたと思われます。浅間神社の社内寺院である千手院には、富士山に関わる仏像が奉納されることもあったと考えられ、特に、大日如来は富士山の本地仏と定められていた仏であり、富士山に関わる可能性が高いと考えられます。

千手院は江戸時代末期に無住となって廃寺となり、明治時代初期には忍野村の天台宗の寺院、東円寺の末寺となりました。さらに今から10年ほど前には建物がなくなったため、堂内の仏像を近くの臨済宗寺院、慈光院に移し、大明見財産区で管理されています。

〈註〉
※3　『甲斐国志』によると、千手院は羽黒修験の寺で、本尊は地蔵菩薩と記されている。

■木造　像高37.2cm
大明見財産区蔵　慈光院保管
江戸時代

大日如来坐像　東円寺

■木造　像高34.5cm
東円寺蔵　平安時代
10世紀末～11世紀前半

東円寺に安置されている平安時代（10世紀末～11世紀前半）の製作と目される大日如来坐像です。東円寺にはもう一躯、古本尊（ふるほんそん）と称されている室町時代の天正6年（1578）に製作された大日如来坐像があます（※4）。本像はその古本尊より古いものですが、明治24年（1891）の「社寺由緒并財産調書」（東円寺文書）には都留市夏狩の大徳寺からの客仏、つまり移坐された仏像であると記されており、東円寺や、富士信仰とのつながりは明確ではありません。一方では、東円寺が別当職をしていた忍草の浅間神社には江戸時代に大日堂が存在しており、あるいはその堂の本尊であった可能性も考えられます。

現在確認されている富士山関連で最も古い大日如来は、鎌倉時代・正嘉3年（1259）製作とされる村山浅間神社（富士宮市）の大日如来坐像（※5）です。また、文献上の古記録では『本朝世紀』久安5年（1149）に末代が富士山頂へ大日寺を建てたという記事があり、その古尊は大日如来ではないかと推測されています。もし本像が富士信仰の所産であれば、それらをさかのぼる最も古い富士山の大日如来像となりますが、それを根拠付ける資料は確認されていません。

本像は智拳印を結ぶ金剛界の大日如来です。細く刻まれた目は彫りくぼめただけの彫眼で、鎌倉時代以降盛行する玉眼に比べて古様です。眉間には水晶製の白毫（びゃくごう）が付けられています。構造は、髻（もとどり）を一体化した筒型の宝冠から頭部と体を通して一材で造る一木造です。このように一木造の中でも宝冠まで一木で造る大日如来は平安時代の10～11世紀に見られる様式です（※6）。両腕や、膝前は後から補修されたもので、別材がつけられています。表面に残る金色の塗料（金泥）も後世のものです。

（髙橋晶子）

〈註〉
※4　富士吉田市歴史民俗博物館『富士の神仏』（富士吉田市教育委員会　2008年）に掲載。

※5　富士宮市教育委員会『村山浅間神社調査報告書』（富士宮市　2005年）に掲載。

※6　忍野村の文化財調査を行った鈴木麻里子氏の御教示による。

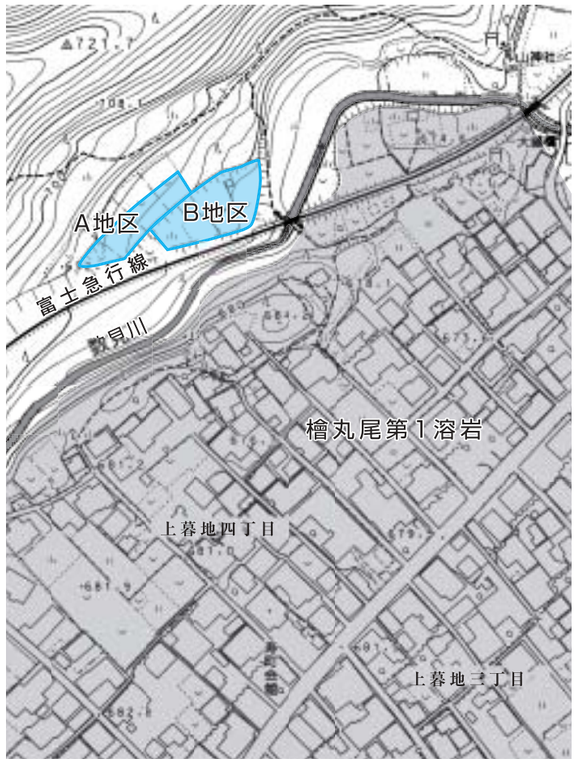
上暮地新屋敷遺跡発掘調査概報（前）

1. 調査の経緯

上暮地新屋敷遺跡は、市内の上暮地地区の山裾部に位置しています。ここは、昭和4年（1929）、富士急行線開設工事の際に多くの土器が出土したと伝えられる場所で、地元でも古くから知られた遺跡でした。昭和60年（1985）に富士吉田市史編さん事業にともなう分布調査によって出土した土器片から縄文時代早期から中期までの遺跡であることが確認されていました。

今回紹介する新屋敷遺跡は、道路建設に伴うもので、平成20年（2008）5月に実施した事前の確認調査によって縄文時代早期～中期、弥生時代中期後半、平安時代の生活の痕跡が確認されたため、同年7月より本格的な発掘調査を実施しました。この報告では、調査を終えた縄文時代前期～平安時代にかけての調査成果を中心に紹介します。

■遺跡の外観（北西から撮影）

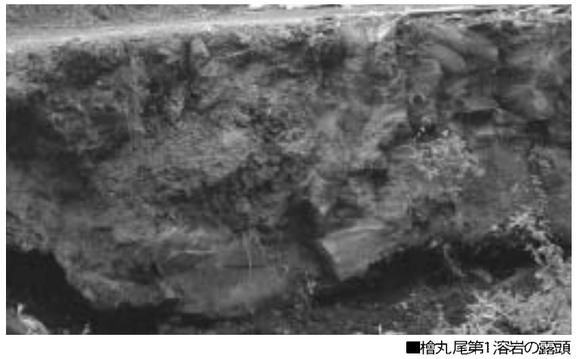


■図1　遺跡位置図

2. 立地と環境

遺跡は、寿町の西側を流れる数見川（中野川）左岸の日向山の山裾に広がり、海抜680mの高さに立地しています。数見川の右岸から上暮地地区一帯は、古墳時代に流下した檜丸尾第1溶岩に覆われています。そのため、古墳時代以前においては、数見川の流路も、現在より東側に位置しており、本遺跡も現在の数見川を越えて溶岩の下まで広がっていたと考えられます。

遺跡の位置する日向山は、名称のとおり東向きの斜面であるため日照時間の長いところであり、市域でも比較的温暖な場所といえます。また、当時の生活面とその脇を流れる数見川の川面とでは比高差が10m以上あります。この比高差のおかげで、洪水などによる土壌の流出や河川が運んだ土砂堆積物も無く、安定した場所となっています。しかしながら、堆積した土層中には、富士山の噴火



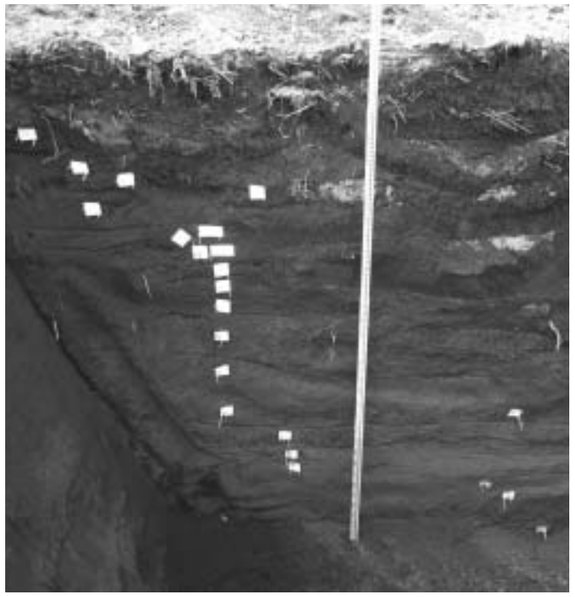
■檜丸尾第1溶岩の露頭

博物館Report

上暮地新屋敷遺跡発掘調査概報（前）

により飛来した火山灰が多く含まれており、噴火災害からは無縁ではなかったことがわかります。繰り返し噴出してきたこの火山灰により、関東ローム層の上に堆積している約13,000年前から現代までにできた土層は、約2mの厚さにも及びます。そして、この厚い土層堆積によって、遺跡に残されたそれぞれの時代の生活面は、新しい時代の人々が古い時代の生活面を壊すという状況が少なく、非常に良好な状態で土層が残されていました。そのため、各時代の生活面から出土する土器や石器などの多くの道具類も、それぞれの時代でほとんど混ざりあうことなく確認できました。また、先述したように、遺跡より東側は、檜丸尾第1溶岩に厚く覆われていますが、更にその下には、縄文時代早期（約8,000年前）に流下したとされる桂溶岩に覆われています。縄文時代早期当時の人々も厚さ3mにもおよぶ溶岩の流れる様を目にしていたかもしれません。

発掘調査は、遺跡の立地が山裾で数見川に向かって傾斜しているため、その地形からA地区・B地区と2箇所に区分し調査を進めていきました。その傾斜の緩急は、場所によって異なり、A地区が10mあたりで2m下がるほどの急傾斜であるのに対し、B地区は10mあたりで1m下がるという緩やかな傾斜でした。そして、各時代の遺構や遺物は、A地区ではほとんどなく、B地区を中心に確認されています（図1）。これは、緩やかな傾斜地であるB地区の方が、居住等に適した地形であったためと考えられます。



■遺跡の土層

3. 遺跡の概要

それでは、各時代の調査成果について紹介していきます。

（1）平安時代（9世紀～10世紀）

この時代では、竪穴住居跡が3軒確認されました。カマドのみが確認された1軒を除いて、住居は約4m四方の大きさで、面積にすると10畳ほどです。これら3軒の住居跡は、5mほどの間隔をおいてみつかっています。同時期に存在した可能性もありますが、1軒のみでしか時期が分かる出土品がなかったため、その特定はできません。また、当時、既に檜丸尾第1溶岩は流れており、周辺の環境も現在とほぼ変わらないものであったと考えられます。そのため、発掘範囲外に未発見の住居跡が多数あるとは考えにくく、小規模な集落であったと思われます。このような山裾部のあまり広くない場所に数軒の住居跡が確認される状況は、市域周辺の遺跡において多くみられます。

■平安時代の竪穴住居跡

（2）弥生時代中期後半（約2,000年前）

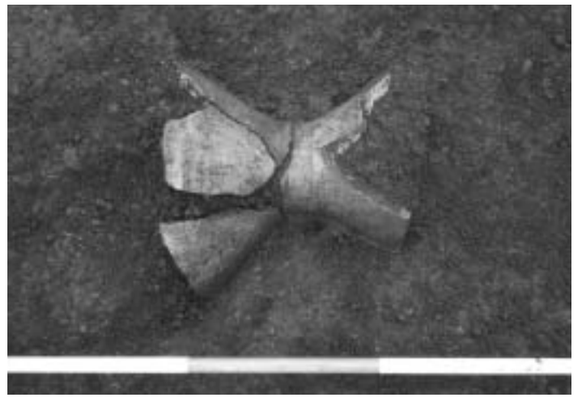
発掘の結果、竪穴住居跡などの居住の痕跡を発見することはできませんでしたが、直線状に分布する土坑（穴の跡）を4列確認することができました。土坑は径50cm、深さ30cmほどの大きさです。2つの列は、約4mの間隔しかありませんが、他の列は、約10mの幅の間隔で並んでいます。このことから柵の跡であった可能性も考えられます。

出土した生活道具については、数は少ないながらもその形を復元できる土器が、4個体ほど出土しており、その内の2個体は、ベンガラ（赤鉄鉱）で赤く塗った壷と器台でした。この2つは、器高が約15cmとサイズも近いことから、セットで使用されたものかもしれません。壷については、底部に穴を開けて使用できなくしており、何らかの祭祀で使われたか、若しくは、お墓の副葬品であった可能性もあります。文様の特徴から長野県で多く作られた土器であり、県内でも類例が非常に少ないものということが分かりました。この時代の遺跡は、山梨県内においては数が少ないため、本遺跡での今回の出土事例は貴重な成果といえるものです。

これらの遺物は、地山となる斜面に沿って分布するのでなく、下位の斜面堆積の土層を削平するかたちで水平に分布しており、一部の土器は、縄文時代早期の層の直上から出土しました。つまり、その土層は、斜面となっている弥生時代以前の土層を削平する形で堆積しており、人為か自然のどちらの影響によるかは不明ですが、弥生時代の頃に地形の改変があったようです。これが人為によるものであれば、居住地や畑地の造営がその背景にある可能性もありますが、竪穴住居跡や畑の畝などの遺構が確認されていないため、その詳細は今後の検討課題になります。

■弥生時代の土坑

■壷と器台



■器台の出土状況

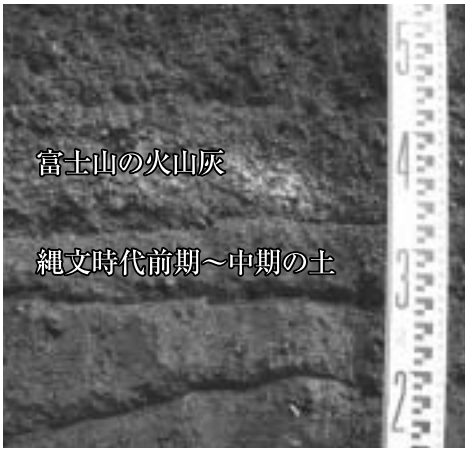
博物館Report

上暮地新屋敷遺跡発掘調査概報（前）

(3) 縄文時代前期中葉～中期前葉（約6,500年～約5,500年前）

弥生時代の層より40cm掘り下げ、さらに厚さ10cmの火山灰層を除くと縄文時代前期～中期の生活面が確認されました。この面から「諸磯a・b式」、「十三菩提式」、「五領ヶ台Ⅰ・Ⅱ式」の土器の破片が多数出土しています。破片の大きさは5cm以下の小さな破片が大半であり、約10cmほどの厚さの土層から混在して出土しています。また、石皿、磨石などの石器の破片とともに、調理に用いたと思われる高熱を受け赤変し割れた石も多数出土しています。

■縄文時代前期～中期の土坑



■縄文時代前期～中期の土層と火山灰

遺構は、直径30～50cmの小形の穴状の窪みが多数確認されています。穴は斜め下へ抉りこむように掘り込まれるものや底面が凸凹の形状のものが多く、その分布にも規則性がみられません。また、遺物の集中するB地区だけでなく、遺物や遺構があまりみつかっていないA地区にも分布します。穴を埋めている土は、直上を覆うのと同じ火山灰と炭化した木片が多量に含まれ、1基については、炭化した直径15cmほどの木材と火山灰が確認されました。以上の状況からこれらの穴は、林地であったところに火山灰が降下したことで、木々が焼失し、その窪みに火山灰が堆積したものと考えられます。火山灰や炭化物を分析することで縄文時代に起った火山災害の一面を明らかにできるかもしれません。また、竪穴住居跡や炉跡のような明確な居住の痕跡は残されていないため、集落の中心は、より数見川に近い方か、数見川を超えた溶岩の下に広がっていた可能性があります。本遺跡の詳細を解明するには、遺跡の本体と思われる溶岩台地の下部を調査することですが、数メートルにも及ぶ岩盤の下を調査することは、現実的に難しいものです。今後は、周辺の調査も含めて、新屋敷遺跡がどのような遺跡であったのかを調査していきます。

（篠原 武）

参考文献
●『富士吉田市史』史料編第1巻 自然・考古 1998富士吉田市教育委員会
●『山梨県史』通史編 原始・古代 2004山梨県教育委員会
●『縄文土器』小林達雄編 2008

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご 案 内

開館時間／午前9:30～午後5:00（午後4:30迄入館可）
休 館 日／火曜日（祝日を除く）、祝日の翌日（日曜・祝日を除く）、12月28日～翌1月3日
観 覧 料／大　人300円（団体240円）
小中高生 150円（団体120円）
団体割引は20名以上に適用
交通案内／●中央自動車道河口湖I.Cより車で10分
●東富士五湖道路山中湖I.Cより車で10分
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことばで「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化（変化）したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1　TEL 0555-24-2411　FAX 0555-24-4665
博物館ホームページURL●http://www.fy-museum.jp　E-mail●hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY
発行/平成20年11月30日　印刷/K2・ONE